

カズの書道講座 (六)

名前が大切

字形を生かすこと同様に、名前もしつかり書くということが大切です。半紙に四文字を書く場合は、必然的に文字全体が大きくなりますから、紙面には名前を書くスペースが無くなってしまい、名前は空いた空間に、ちよこちよこつと入れ込む、という状態にならざるを得ません。

しかし、作品の中で一番大切なものは名前、つまり落款です。名前を入れるということは、自分の作品に責任を持つということです。落款とは、落成款識（落成款識）の略（異論もありますが通説に従います）で、書画に署名・鈐印（印を捺すこと）をして完成したことを著します。古い書画などの評価は、書き手が誰かということでは価値が違ってきますから、それを鑑みても、名前が一番大切だということが言えます。

ですから制作にあたる時は、落款を、更に落款印をどこに入れるか、ということまで考えて書くことが必要です。くれぐれも「空いた所に書けばいいや」などという安易な考えは持たないで下さいね。これは「品を作る」ということにも関係してきます。

文字のデフォルメ

字形を生かすということは、前回申し上げました

ように、楷書に見える基本形の場合と、文字をデフォルメ（造形美術上の用語で、変形させるとか形をゆがめるの意）させて、様々な字形に表現する場合があります。用例をご覧ください。

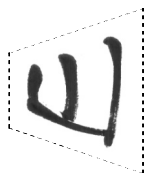
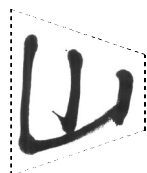
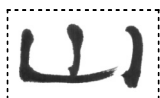
デフォルメの要素は、線と字形によって考えることができます。線（用例1）については、長短・細太・方向などに変化をつけることで、文字の趣が違って感じられます。さらに様々な字形（用例2）に変化させますと、その印象は全く違ってきます。

このように、線と字形でデフォルメさせることによって、造形表現は無限に広がってきますから、頭の中の新陳代謝が活発化し、書くことが益々楽しくなったりしてきます。つまり、文字をデフォルメして、字形のバランスを考えながら制作をしましょう。ということなのです。

ただし、デフォルメする場合、誤字には十分注意しなければなりません。実画（必要な線）を虚画（あっても誤字にならない線）にしたり、虚画を実画にしてしまうことはよくあります。

用例の「山」という文字は、縦線が三本横に並び、その下に横線が一本、画数は三画としても四本で成り立ちます。同じ四本といっても横線が上に書かれては山にはなりません。この規則を破らない限り山という文字は成立しますから、範疇の中で長くしたり太くしたり、潤濁を入れたりしながら、様々な表現を試みて楽しんで下さい。

用例2



用例1

⑦	⑤	③	①
左右の縦線を外側に	全部の線を太く	縦線3本を短く	左右の縦線を長く 中を短く
⑧	⑥	④	②
左右の縦線を内側に	右の縦線を細く	縦線3本を長く	左右の縦線を短く 中を長く